

JSCR Newsletter



日本糖質学会会報
JSCR Newsletter published by
The Japanese Society of Carbohydrate Research

会長就任にあたって

日本糖質学会 会長 梶原 康宏

このたび、2025 年度より日本糖質学会会長を拝命いたしました。伝統と実績を誇る本学会の舵取りという重責を担うこととなり、身の引き締まる思いでおります。会員の皆様におかれましては、日頃より学会活動へのご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

本学会は、1978 年に設立された炭水化物研究会を前身とし、1989 年に現在の学会組織へと発展して以来、糖質科学の基礎から応用、医学分野に至る幅広い研究領域を牽引してまいりました。化学と生物学を両輪とする学際性、そして若手研究者、女性研究者、そしてベテラン研究者がバランスのとれた比率で参加し、自由闊達に議論できる場を大切にする姿勢は、長年にわたり本学会の大きな強みであり続けています。

2025 年を迎えた現在、糖質科学を取り巻く環境は大きな転換期にあります。ヒューマングライコーム研究の本格的な進展、AI・情報科学との融合による解析技術の高度化、さらには創薬・診断・材料科学への社会実装が急速に加速しています。一方で、研究環境の国際競争は一層激しさを増し、若手研究者の育成や国際的な人材循環の確保は、学会の重要課題となっています。

こうした中、本学会の最も重要な役割は、第一に年会を中心とした研究交流の場をさらに活性化させること、第二に次世代を担う若手研究者を継続的に支援すること、そして第三に国際連携を通じて日本の糖質科学の存在感を世界に示していくことにあると考えています。学生会員支援、奨励賞・優秀講演賞制度、国際学会参加支援など、これまで築かれてきた取り組みを大切にしつつ、時代に即した形へと発展させていきたいと存じます。

また、近年、遺伝子を自在に操作できる技術や、巨大なデータベースを統計的に処理し新たな予測が可能となる AI 技術の劇的な進歩があります。このような環境下で糖質化学、糖鎖生物学をどのように融合また独自に発展させていくか大きなステップが求められます。特に若い研究者の方には、できる限り学際的な国際学会にも参加して欲しいと思います。そして他分野の立場から糖質化学、糖鎖生物学を俯瞰しこれまでの研究を継承しつつ、次の 20 年で新たに出現するであろう新しいテーマ、手法を想像しながら独創的な研究を展開していただきたいと思います。

糖鎖は細胞表層、タンパク質表層を覆い、なぜ糖鎖がその場所にあるのか、なぜ無数に密集しているのか、いまだ誰も明確な説明ができないと思います。また、一部を除き、それら大半の糖鎖に対する受容体が見つかったわけではないにもかかわらず、糖鎖は、その存在がなくなると致死、あるいは重篤な症状に至るという不思議で、そして重要な分子です。糖質化学、糖鎖生物学はこの生命の不思議なシステムを解明するために、これまでにない新しい手法、アイデアを駆使しさらに前進する必要があります。

2025 年は、学术界全体において「社会との対話」や「研究成果の可視化」が強く求められる年でもあります。糖質科学は、生命現象の根幹に関わる基礎科学であると同時に、医療・環境・産業へと展開可能な高い潜在力を有しています。本学会としても、独創性に富んだ基礎研究を尊重しながら、社会との接点を意識した発信を強化していく所存です。

最後になりましたが、本学会は会員一人ひとりの研究への情熱と相互の信頼によって支えられています。今後も、分野や世代を超えた交流の場として、皆様にとって「参加してよかった」と実感できる学会であり続けられるよう、微力ながら全力を尽くしてまいります。会員の皆様のますますのご健勝とご活躍を祈念するとともに、引き続きのご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

CONTENTS

■会長就任にあたって	梶原康宏◎1	■2025SFG 年会開催報告	◎12
■第 44 回日本糖質学会年会開催報告	大山 力◎3	■訃報	◎15
■第 45 回日本糖質学会年会開催予告	竹川 薫◎6	■トラベルグラントの応募受付	◎16
■第 7 回日本糖質学会優秀講演賞選考結果	◎7	■事務局報告	
■第 27 回ポスター賞選考結果	◎8	理事会議事録	◎17
■第 29 回日本糖質学会奨励賞受賞候補者募集	◎9	評議員会・総会報告	◎18
■鈴木邦彦先生を偲んで	松田純子◎10	■理事・評議員・名誉会員・顧問・維持会員	◎20

第44回日本糖質学会年会(弘前)を主催して 世話人代表 弘前大学大学院医学研究科/青森県病院事業管理者 大山 力

2025年10月2日から3日間、弘前市文化センターにおきまして第44回日本糖質学会年会を開催させて頂きました。私自身は2023年に弘前大学泌尿器科学講座を定年退職し、県立病院の経営や統合といった医療行政が本職になっている身でしたので、後任の弘前大学泌尿器科学講座・畠山真吾教授に世話人副代表をお務め頂き、盛 和行先生に事務局長として大きな役割を担って頂きました。世話人の皆様、Advisory boardの皆様の尽力に感謝申し上げます。

以前、青森市で参加者2000名程度の学会を主催させて頂いた折に感じましたのが、地方開催での参加者数の問題でした。地方開催の場合、参加者数は宿泊のキャパシティと交通の輸送能力が律速段階になります。本州北端の小都市での開催でございましたので、当初は参加者数が少なくなるのではないかと心配しましたが、450名の皆様にご参加頂きました。多くの皆様にご参加頂きまして深く感謝申し上げます。

さて、今回の年会はテーマを「糖質科学と臨床医学の融合」とさせて頂き、異なる領域で研究活動を展開している研究者の皆様が一堂に会して、交流を深めて頂きたいという思いで学術集会の準備を進めさせて頂きました。お陰様で、一般演題(口頭/ポスター)213演題をご登録頂きました。ご登録頂いた演題はすべてご希望通りのカテゴリで発表して頂きました。また、指定演題(特別講演/ダイバーシティ推進セミナー/追悼企画/シンポジウム)として13演題、計226演題のご登録を頂きました。さらに、ランチョンセミナー8演題、奨励賞受賞講演6演題、優秀講演賞第2次審査講演7演題と多くの充実した発表を行って頂きました。また、The Carbohydrate Research JSCR44 Poster Awardを4名の方が受賞されました。

実り多い学術集会にするために、ダイバーシティ推進セミナーの他に遠藤玉夫先生追悼企画「遠藤玉夫先生と歩んだ糖質研究の軌道と未来への展望」とシンポジウム「Clinical Glycobiology:現状と展望」を企画させて頂きました。遠藤玉夫先生は、糖質科学の黎明期からその発展に多大な貢献をされ、多くの共同研究者・後進研究者に影響を与えてこられました。常々、遠藤玉夫先生のご業績に感銘を受けておりましたので、萬谷 博先生と金川 基先生に遠藤玉夫先生の追悼企画をお願いしました。遠藤先生と深い関わりを持たれた先生方をお招きし、当時の研究エピソードを振り返りながら、遠藤先生の果たされた役割を再確認し、糖質研究を発展させるべく今後の方向性を共に考える機会にさせて頂きました。脳神経内科学の戸田達史先生と遠藤玉夫先生との深い関わりを拝聴できたことも大きな喜びでした。また、臨床と基礎を結ぶ懸け橋としての糖鎖生物学に焦点を当て、Clinical Glycobiology という学術領域の提唱をさせて頂きたいという思いから、シンポジウム「Clinical Glycobiology:現状と展望」を企画させて頂きました。三善英知先生と中山 淳先生に座長をお務め頂き、実り

多いシンポジウムにさせて頂きました。

さて、私の糖鎖研究は箱守仙一郎先生、福田 穰先生、福田道子先生にご指導頂き、とても充実した研究生生活を送ってきました。研究対象も糖脂質から始まり、糖たんぱく質が加わりました。2004年に秋田大学から弘前大学に異動しまして、プロテオグリカンも研究対象に加わりました。学生時代に生化学を教えて頂いた遠藤正彦先生に再びご指導頂くことになったわけです。そして、ヒアルロン酸の代謝と機能が研究テーマに加わりました。Yu Yamaguchi 先生には、The Burnham Institute への留学時からご支援頂き、弘前大学泌尿器科学講座の若手医師も指導して頂いておりますので、特別講演は Yu Yamaguchi 先生にお願いしました。The Biology of Proteoglycans and Hyaluronan: What is Known and What Remains to be Elucidated という素晴らしい講演を賜りました。先生ご自身も「言いたいことが言えた。」とご満足頂いたようでしたが、会場の皆様の満足度も高かったと思います。

ポスター会場での若い研究者の皆様の熱烈討論も印象に残りました。臨床医学の学会では見られないような白熱したポスター討論を目の当たりにして、感動しました。そして、若手研究者の皆様が研究しやすい環境をさらに整備する必要性和責任を感じました。

さて、昨今、我が国の経済動向には厳しいものがございます。病院経営もこれまでにない苦境に立たされておりまして、学術集会を企画する上で費用面での問題に直面致しました。そのような厳しい局面におきましても、ランチョンセミナー、ブース展示や広告掲載をして頂いた企業各社、さらに多くの団体から多大なるご支援を頂きました。ご支援頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。

また、10月3日は「糖鎖の日」でございまして、会場の皆様と「とうさ」の文字を作って情報発信できたことも本年会の良い思い出です。メイン会場で文字を作る試みも始めてでしたので、限られた時間内にしっかりと美しい「とうさ」の文字が作れるかどうか心配しましたが、皆様のご協力で良い作品ができたと思っております。糖鎖研究者のチームワークの良さも感じた企画でした。iGCORE の皆様と年会担当校の連携もうまくいったと思います。本年会開催期間中は天候にも恵まれ、エクスカッションや会員懇親会で青森・津軽の魅力も感じて頂けたのではと思っております。

糖鎖科学の益々の発展と第45回年会(福岡)のご盛會を祈念しております。

糖鎖の日 人文字チャレンジ



特別講演：Yu Yamaguchi 先生



ポスター発表



シンポジウム



表彰式



エクスカーション：弘前城



懇親会



エクスカーション：白神山地



年会スタッフ



第 45 回 日本糖質学会年会(福岡)開催予告

世話人代表 九州大学 竹川 薫

第 45 回日本糖質学会年会を、2026 年 9 月 14 日(月)～16 日(水)に、パピヨン24(福岡県福岡市)にて開催いたします。2000 年以降、本年会は九州で 3 回(2007 年福岡、2012 年鹿児島、2021 年鹿児島)開催されてきましたが、福岡での開催は 19 年ぶりとなります。このような歴史ある学会を再び福岡の地で開催できますことは、私にとって大変光栄であり、実行委員一同、皆様にご満足いただける年会となるよう鋭意準備を進めております。

私は京都大学農学研究科在籍時に山本憲二先生のご指導のもと、微生物由来エンドグリコシダーゼの研究を行ってまいりました。1987 年に香川大学へ赴任してから糖転移活性に関する研究を継続していたことから、弘前大学医学部・遠藤正彦先生が主宰されたエンドグリコシダーゼに関する科研費基盤研究(A)の研究班に加えていただき、1997～2000 年には毎年弘前で開催された班会議に参加する機会を得ました。その班員には、エンドグリコセラミダーゼ研究で著名な九州大学農学研究院の伊東信先生もおられ、刺激を受けるとともに多くを学びました。伊東先生が 2007 年に福岡で糖質学会年会を主催された際に私も参加し、その折に九州大学農学研究院・発酵化学研究室の教授公募を教えていただいたことが、私が 2008 年より九州大学へ移る契機となりました。私にとって重要な地である弘前と福岡で糖質学会年会が続けて開催されることに、深いご縁と運命的なつながりを感じています。



現在、糖質科学は、糖質・糖鎖の構造解析、合成、代謝、酵素機能といった分子基盤研究の飛躍的な進展によって大きく発展しています。近年は MS、NMR、Cryo-EM などの高度分析技術に加え、AI を活用したデータ解析の発展により、これまで解明が困難であった分子機構の理解が急速に進み、新たな知見が次々と生まれています。さらに糖質科学は、化学・生化学・微生物学・合成生物学・食品科学・材料科学など、多様な領域が交差する学際的研究分野です。本年会では、この分野横断性を最大限に活かし、異なるバックグラウンドをもつ研究者が交流し、新たな連携や研究シーズが生まれる場となることを願っています。このような趣旨から、今回の年会テーマを「糖質科学の深化と融合：分子基盤から生体機能へ」といたしました。糖質科学のさらなる発展と隆盛に寄与する実りある学術集会となるよう、全力を尽くす所存です。

なお、2007 年および 2012 年の九州での年会では、台風の影響により交通機関が大きな混乱に見舞われました。今年の年会が天候に悩まされることなく、無事に開催できますことを心より願っております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

会期:2026 年 9 月 14(月)～16 日(水)

会場:パピヨン 24 〒812-0044 福岡県福岡市博多区千代1丁目 17-1

URL: <https://www.papillon24.jp/>

主要題目

糖質の化学、糖質の生化学、糖質の構造生物学、糖質の化学生物学、糖鎖と感染症、糖鎖と病理学、糖鎖と免疫学、糖鎖研究とバイオインフォマティクス、糖質の材料科学、糖質の反応と計算科学、糖質科学研究成果の社会実装、産学連携

年会の構成

特別講演、日本糖質学会奨励賞受賞講演、ダイバーシティ推進セミナー、優秀講演者第2次審査、一般発表、ランチョンセミナー、テクニカルセミナー、企業展示等。

一般発表には以下のカテゴリーがあります。

- (1) 口頭発表 A(20-25 分) 1 研究室あたり 1 件。
- (2) 口頭発表 B(12-15 分) 研究室当たりの発表件数に制限なし。
- (3) ポスター発表 研究室当たりの発表件数に制限なし。

一般発表の発表形式に対し、採否は世話人会にご一任ください。

参加・発表申込み:申込方法、発表の方法の詳細は 2026 年 4 月中に学会 HP の年会専用ページに掲載予定。

発表申込み期間(予定):2026 年 5 月 1 日～6 月 30 日

発表採択の通知:発表受付終了後、1か月程度で演者に e-mail で通知。

参加登録料(予定):<>内は 2026 年 8 月 1 日以降申込みの金額。

日本糖質学会正会員:8,000 円<10,000 円>、日本糖質学会学生会員:3,000 円<4,000 円>、一般:10,000 円<12,000 円>、一般学生:4,000 円<5,000 円>、名誉会員:無料、永年会員:3,500 円<4,500 円>

共催・協賛・後援の学会の規定により、共催・協賛・後援の学会の学会員は、日本糖質学会会員と同額の参加登録料で参加できます。

託児室:会期中、託児施設を開設予定。

第 7 回 日本糖質学会優秀講演賞(今年度の選考結果について)

授賞選考委員 安藤 弘宗
木下 聖子
藤本 ゆかり
松尾 一郎

日本糖質学会優秀講演賞は 2018 年に新設された賞であり、応募資格者は本会の学生会員、または 32 歳未満の正会員ですが、審査においては、発表内容、発表法、質疑応答において優れた講演を行い、今後、糖質科学の発展に寄与すると期待される講演者が選考されます。また本賞は研究テーマや所属研究室を審査対象とするものではなく、グループ研究の場合については発表者の貢献が大きいことが認められる場合に限っています。

日本糖質学会優秀講演賞の審査については、書類選考と糖質学会年会会場での発表審査の 2 段階選抜方式をとっています(詳細は 糖質学会の HP でご確認ください; https://www.jscr.gr.jp/?page_id=146)。書類選考においてはライフイベントなどについても考慮され、口頭発表においては一般講演に比べ長い質疑時間が与えられます。二次審査において発表を行ったファイナリストの方々に対してはファイナリスト証を発行します。

本年度は第 44 回日本糖質学会(2025 年 10 月 2 日～10 月 4 日(弘前): 大山 力代表世話人のもと開催)において、一次選考を通過したファイナリスト7名が口頭発表を行いました。授賞委員会が厳正なる選考を行い、その後、理事会の議を経て、下記 2 名の方々を受賞者と決定いたしました(敬称略)。表彰は、2026 年度総会(2026 年の第 45 回年会(福岡)中に開催)にて行う予定です。惜しくも選に漏れた方々の発表も素晴らしいものでした。次回年会でも多数の申し込みと活発な質疑を期待しております。

磯崎 友花(慶應義塾大学大学院理工学研究科 博士後期課程 3 年)

「Late-stage ホウ素媒介アグリコン転移反応を用いた NTM 症に対する新規治療薬リードの創出」

本田 晃伸(国立研究開発法人理化学研究所 開拓研究所 基礎科学特別研究員)

「ゼブラフィッシュ受精卵における遊離糖鎖生成を担う新奇 N-グリカナーゼ: Ngly2」

(50 音順)

第 27 回 日本糖質学会ポスター賞(今年度の選考結果について)

授賞選考委員 安藤 弘宗
木下 聖子
鈴木 匡
藤本 ゆかり
松尾 一郎

本賞は日本糖質学会におけるポスター発表者で 35 歳以下の会員の中から 4 件程度を選び「日本糖質学会ポスター賞」として表彰し、副賞としてシアル酸研究会からの賞金を贈呈するものです(詳細は、糖質学会ポスター賞規程をご覧ください; https://www.jscr.gr.jp/?page_id=146)。本年度は第 44 回日本糖質学会(2025 年 10 月 2 日～10 月 4 日(弘前): 大山 力代表世話人のもと開催) のポスターセッションの演題の中から、予め発表申し込み時点で申請のあった 76 題(全発表件数 144 題)を対象に、発表要旨、ポスターの出来栄、発表内容および質疑応答などの諸点を踏まえ、選考委員による投票を行い、授賞選考委員が事務局員立ち会いのもと厳正に開票・集計を行いました。その結果、今年は下記 4 名の方々を受賞者と決定いたしました(敬称略)。表彰は、2026 年度総会(2026 年の第 45 回年会(福岡)中に開催)にて行う予定です。惜しくも選に漏れた方々の発表も素晴らしいものでした。次回年会でも会員の皆様多数の申し込みをお願いいたします。最後に、2 日間にわたり選考にあたって下さった選考委員の方々に改めて御礼申し上げます。

立尾 清悟(自然科学機構・分子研)
「糖転移酵素のゴルジ体内局在を制御する分子ネットワークの解析」

富田 崇羽(岐阜大院・自然科学技術研究科)
「糖転移酵素のチロシンリン酸化による制御」

飯田 理世(京大院・生命)
「マウス消化管各部位におけるムチン O-結合型糖鎖の構造と腸内細菌叢の関連」

平尾 宏太郎(阪大院・理)
「核磁気共鳴法を用いた糖鎖と水の相互作用様式の解明」

(50 音順)

第 29 回日本糖質学会奨励賞 受賞候補者募集

授賞選考委員 藤本 ゆかり
安藤 弘宗
木下 聖子
松尾 一郎

第 29 回日本糖質学会奨励賞受賞候補者の選考を開始します。

受賞候補者の資格:糖質科学の分野で優れた研究成果を挙げた満 40 歳以下(2026 年 7 月 1 日現在)または学位取得後 10 年以内の研究者で, 2024 年 7 月 1 日以前から継続して本会会員であること。ただし、出産、育児、介護のようなライフイベントを考慮する。

日本糖質学会奨励賞募集の方法:以下に示す2段階で行われます。

1. 本会会員による候補者の推薦

会員は、自薦、他薦を問わず候補者1名を推薦できます。氏名、所属機関・研究室名と所在地、TEL/FAX、メールアドレス、A4 用紙 1/2 程度の業績の説明文、代表的な発表論文2ないし 3 報(タイトル、氏名、雑誌名、掲載年)を A4 判に記し、jscr.office@gmail.com までメールでお送り下さい(メールの場合、事務局からの受理通知を確認してください)。

締切:2026 年 2 月 9 日(月)(必着)

2. 授賞選考委員会による候補者の選出

理事会にて選出した委員による授賞選考委員会が、会員からの被推薦者の中から原則として 10 名以内の候補者を選び、候補者本人に下記応募書類(1~4)の事務局への提出を依頼します。

応募書類(候補者本人から提出):

- 1) 所定の様式の応募書類(本会事務局より候補者本人に送付)
- 2) 研究概要の紹介本文(図表を含めて A4 用紙 3 枚以内厳守)
- 3) 関連論文リスト A4 用紙に著者(本人に下線)、論文題目、誌名、巻、ページ(初めと終わり)、掲載年を記載
- 4) 主な論文 3 編以内の別刷りもしくはその写しを各 1 部

選考と発表の方法:選考は授賞選考委員会にて行い、受賞者は理事会にて決定後に JSCR ニュースレター誌上に発表し、表彰は総会(第45 回日本糖質学会年会(福岡);2026 年 9 月 14 日~16 日)にて行う予定です。

提出先:

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町 1-38-12 油商会館 B 棟 3 階

日本糖質学会事務局

問合せ:e-mail:jscr.office@gmail.com

鈴木邦彦先生を偲んで

川崎医科大学 病態代謝学 松田 純子

本学会名誉会員の鈴木邦彦先生は、2025年2月12日、93歳にて急逝されました。邦彦先生は1932年(昭和7年)2月5日のお生まれで、1955年に東京大学教養学部科学史・科学哲学分科を卒業、1959年に東京大学医学部医学科を卒業されました。卒業後は、当時立川にあった米国空軍病院でインターンを務められ、翌1960年、安保闘争のさなかに渡米されました。当時発足したばかりであったニューヨークの Albert Einstein College of Medicine において、神経内科レジデントとして研鑽を積まれました。その後、ペンシルベニア大学を経て、1986年から2002年までノースカロライナ大学(University of North Carolina at Chapel Hill: UNC)において、UNC 神経科学センター長を務められるとともに、神経内科・精神科名誉教授として活躍されました。この間、1993年から1995年にかけて、国際神経化学会(International Society for Neurochemistry: ISN)のプレジデントを務められました。2003年から2007年までは、日本と米国を行き来されながら、東海大学糖鎖科学研究所の所長を務められました。そして2008年には、米国永住権を放棄し、48年間に及ぶ米国生活に終止符を打たれ、奥様であり、長年の共同研究者でもある神経病理学者・鈴木衣子先生とともに日本へ帰国されました。また、2002年には日本学士院賞を受賞され、2008年には日本学士院会員(第7分科所属: 神経化学・神経内科・遺伝性神経疾患専攻)となりました。その後、長年にわたり、日本学士院紀要 *Proceedings of the Japan Academy, Series B* の Editor-in-Chief を務められました。

邦彦先生は、皆様ご存じのとおり、糖脂質(glycolipids)代謝およびその代謝異常を基盤とする神経疾患の分子病態研究における世界的権威であり、糖質科学のコミュニティからも高い評価を受けてこられました。なかでも、遺伝性脱髄疾患であるクラッベ病(Krabbe 病、globoid cell leukodystrophy)が、ライソゾーム酵素であるガラクトシルセラミド β -ガラクトシダーゼの欠損によって生じることを世界に先駆けて発見されたこと、さらに疾患モデルマウスである Twitcher マウスを用いて、その病態形成の核心となる分子機構を生化学的に明らかにされたことは、特筆すべき業績です。さらに1972年には、それまで主たる原因と考えられていた一次基質(ガラクトシルセラミド)の蓄積よりも、ガラクトシルセラミドの分解産物であり、強い細胞毒性を有する脂質であるガラクトシルスフィンゴシン(サイコシン)の蓄積が、オリゴデンドロサイト(髄鞘形成細胞)を選択的に傷害し、神経脱髄を引き起こすという「サイコシン仮説(Psychosine hypothesis)」を提唱されました。この仮説は、Krabbe 病の急速かつ重篤な神経変性を説明する理論的基盤となり、その後の研究および治療戦略に多大な影響を与えました。現在では、本概念は Krabbe 病にとどまらず、Gaucher 病など他のスフィンゴリピドースにおいて、関連脂質の分解産物が病態形成に寄与する可能性を

示す普遍的枠組みとして発展しています。これらの業績については、Krabbe 病発見 100 周年を記念して 2016 年に *Journal of Neuroscience Research* に掲載された総説論文 “My Encounters With Krabbe Disease: A Personal Recollection of a 40-Year Journey With Young Colleagues” に詳述されていますので、ぜひご参照ください。

研究室を離れた邦彦先生は、実に多彩な趣味をお持ちの方でした。とりわけ音楽への造詣は深く、日本学士院賞を受賞された際には、その賞金で迷うことなくピアノを購入されたという逸話は、先生のお人柄をよく表しています。愛聴されていたのはシェーンベルクなどの現代音楽であり、ピアニストのマウリツィオ・ポリニによるシェーンベルク作品のコンサートを横浜で一緒にしたこと、今も忘れがたい思い出です。古典的なものよりも新しいものを好まれる先生の一面が、そこに垣間見えるように思います。また、文学では森鴎外に強い親近感を抱いておられ、アメリカと日本双方のご自宅に鴎外全集があったことを記憶しています。写真撮影も先生のご大切な楽しみの一つでした。学会懇親会の場で、いつも一眼レフカメラを首から下げておられた先生のお姿を思い出される方も多いのではないのでしょうか。そのほか、日本野鳥の会の幹事を務められていたことから分かるように無類の鳥好きであり、また大学時代は山岳部に所属され、つい最近まで「マンション登山」と称して、31 階のご自宅まで階段で登ることを日課としておられたと伺っています。

私は、UNC 神経科学センターにおける邦彦先生の研究室で、最後のポスドクとして 3 年間研究生生活を送らせていただき、いわば「鈴木研の末っ子」として直接ご指導を受ける幸運に恵まれました。ありがたいことに、帰国後も学会や研究会で一緒にする機会が多く、今でいう X (旧 Twitter) のような、たわいもなく、くすりと笑えて、少し毒のある「つぶやきメール」を定期的にいただいていた。以下に、最後の 2 通を原文のまま引用します。

2024 年 12 月 18 日付メール:

「小生の My Number Card 5 年の期限が、今度の 2 月 5 日で切れるので、更新の申請をしておいたら、港区の区役所から新しいのが出来たから受け取りに来いという通知が来たので、今朝行って新しいのを貰って来ました。別に何ということもないけれど、今度のは何と 2035 年まで 10 年間有効!! いくら小生が図々しくても、2035 年には小生 103 歳!! 憎まれっ子世に憚るのも好い加減にしろ、と自分でも思うよね。」

2025 年 1 月 21 日付メール:

「最近、小生の頭を離れないんだけど、客観的に知能検査をしたら、トランプはどの程度に出るのかな?? とてもじゃあないけど、小生が付き合いたいと思う相手じゃあない。これはお互い様に違いないけどね。」

これらの文章からも、邦彦先生が心身ともにいかにお元気であられたかをご理解いただけたと思います。そのため、突然の訃報に接した際には、言葉を失う思いでした。もう二度と、このような軽妙なメールをいただけないのだと思うと、深い悲しみを禁じ得ません。「最後のポストク」
として先生のもとで、好奇心をもって研究に取り組み、

人生を豊かに味わう姿勢を学べたことは、現在の私に計り知れない影響を与えています。鈴木邦彦先生の長年にわたる偉大なご業績に深甚なる敬意を表するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

2025 年 Society for Glycobiology 年会開催報告

木下 聖子 SFG 会長

第 52 回 Society for Glycobiology 年会在、2025 年 11 月 9 日から 12 日までカリフォルニア州サンディエゴにて「World Glyco Expo」をテーマに開催されました。本大会には世界各国から学際的な研究者が集い、糖鎖科学研究の多様性と広がりを出す場となりました。プログラムは、化学生物学や合成化学から、健康科学、微生物学、植物科学、さらには情報学や分析技術まで、糖鎖科学が広範な分野に及んでいることを示す構成となっていました。

会議初日の日曜日には、「Glyco in Biotechnology」をはじめとするサテライトセッションが開催されました。また、若手研究者とバイオ製薬企業、政府機関、学術界の指導者を結びつける若手研究者メンタリングプログラム「Glycopalooza」も実施されました。会員主催のワークショップでは、システム糖鎖生物学、糖鎖機能アノテーション、国際ヒトグリコームイニシアチブ、ヒト糖鎖免疫学、BioFoundry GREAT プロジェクトなどが取り上げられました。本会議では 3 日間にわたり 11 の科学セッションが行われ、糖鎖生物学研究の全領域を網羅しました。

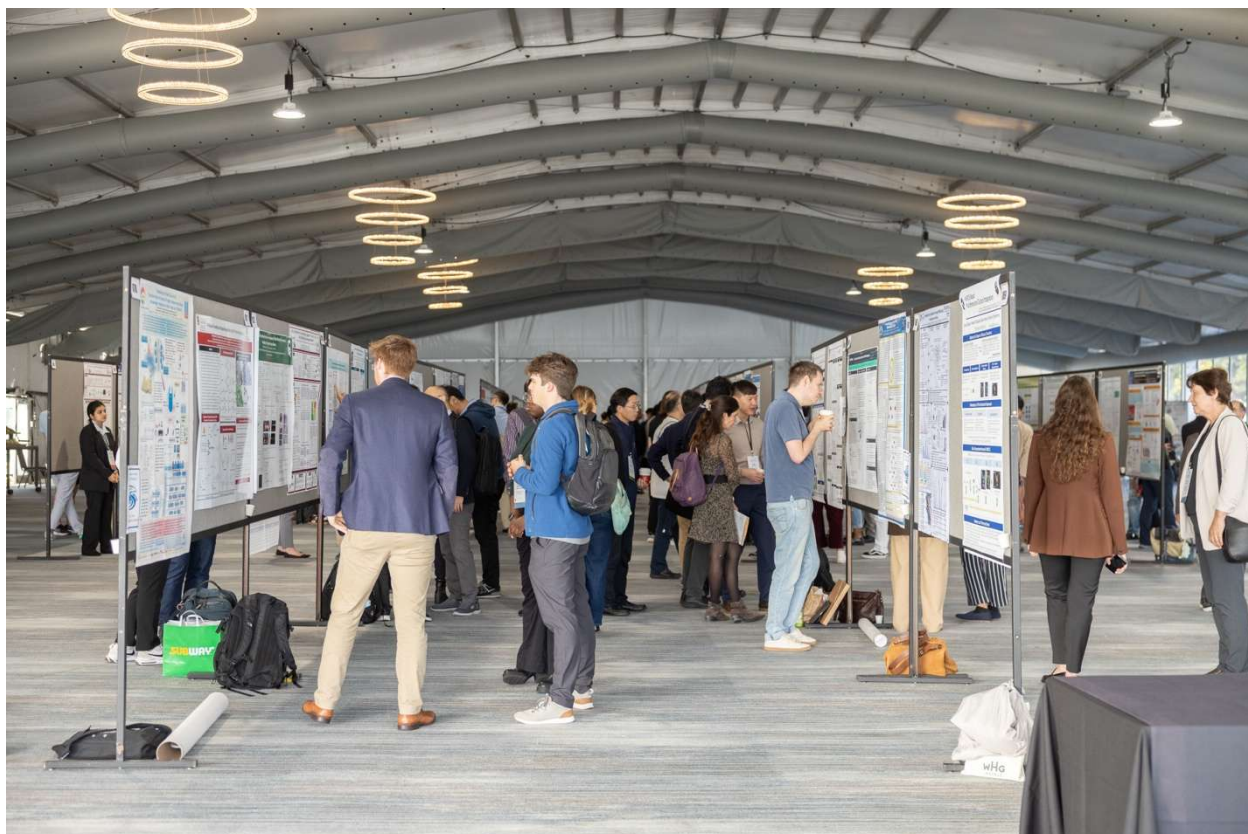
学会は糖鎖科学における業績をお持ちの研究者を表彰しました。マサチューセッツ工科大学(MIT)のローラ・キースリング博士は、糖鎖認識の理解と免疫および健康への関連性における基礎的貢献により、カール・マイヤー講演賞を受賞しました。イリノイ大学シカゴ校のカレン・コリー博士は、シアリルトランスフェラーゼの理解に対する生涯にわたる貢献により、ロザリンド・コーンフェルド生涯功労賞を受賞しました。

マッコーリー大学のニコール・パッカー博士は、グライコミクス、グライコプロテオミクス、バイオインフォマティクスにおける先駆的業績により、プレジデント・イノベーター賞を受賞しました。ネブラスカ大学医療センターのレベッカ・ガンドリー博士は MCP/ASBMB 講演を行い、質量分析と糖鎖生物学におけるリーダーシップが称えられました。ハーバード大学のライアン・フリン博士は、細胞表面の糖鎖修飾 RNA 分子に関する画期的な発見により、Glycobiology Significant Achievement 賞を受賞しました。

本会議では次世代の糖鎖科学者の育成にも力を入れました。33 名の大学院生およびポスドク研究員に渡航助成金を授与したほか、応募演題から 26 名の講演者を選出し、科学セッション中に口頭発表の機会を提供しました。

2 つの専用ポスターセッションに加え、展示ホールでは糖鎖生物学研究のための革新的な技術や製品を提供する企業や研究センターが出展しました。40 名のポスター審査員が学生とポスドクによるポスター発表を審査し、12 名の若手科学者がポスター賞を受賞しました。受賞者には『Essentials of Glycobiology』第 4 版が贈られました。

受賞講演、テーマ別セッション、ワークショップ、ポスター発表、ネットワーキングの機会を組み合わせた本大会は、糖鎖科学が今なお活気に満ちた学際的分野であり、生物学的システムの理解や新たな治療法の開発に大きな影響を与え続けていることを示す成功を収めました。なお、日本糖質学会からの支援を頂き、大変に助かりました。おかげさまで日本から多くの参加者により盛り上げて頂き、感謝申し上げます。





本学会永年会員 神奈木玲児 先生におかれましては、2025 年 9 月 13 日に ご逝去されました。
ご冥福をお祈り申し上げますとともに、謹んでお知らせいたします。

The 32nd International Carbohydrate Symposium (ICS 2026) トラベルグラントの応募受付

ICS2010 記念糖質科学基金担当理事(ICO 担当) 梶原 康宏

2010 年に日本で開催された第 25 回 International Carbohydrate Symposium (ICS2010)を記念し、設立された基金で、ICSトラベルグラントの応募を受け付けてきました。本年度からは、糖質学会でその趣旨を受け継ぎ、引き続きサポートをしていくことになりました。

趣旨: 本補助は我が国における糖質科学分野の国際化に資する目的に使用する。

用途: 若手研究者の国際糖質シンポジウムおよび国際複合糖質シンポジウムにおける旅費の援助を行う。

応募資格: 日本糖質学会の会員であり、国内の研究機関に所属し、大学院生として在学中、あるいは博士号取得後 8 年以内程度もしくはそれと同等の研究歴を持ち、The 32nd International Carbohydrate Symposium (ICS2026, Bratislava; <https://www.ics2026.sk/>)において口頭発表(招待講演を除く)を行う方。ただし、応募多数の場合は、大学院生及び若手のポスドクを優先的に考慮する。本補助以外からの助成を受ける方は対象外と致します(応募中で採否未定の方はその由記載ください)。

件数: 2 件程度 助成額: 1 件あたり 20 万円程度を上限とする(ただし、その時期の見積書をもとに援助額を決定する)。

必要書類: (1)ICS2026 における発表の要旨、(2)口頭発表採択を証明するもの、(3)履歴書、(4)業績リスト、(5)指導教員もしくはそれに準ずる方の推薦書(A4 で 1 枚程度)。以上をメール添付にて日本糖質学会事務局(jscr.office@gmail.com)に送付。

*可能な限り、上記5点を一つの PDF ファイルにしてお送りください。

応募締め切り: 2026 年 6 月 1 日(月)(ただし、アブストラクト採択通知状況によって延長されることがあります)

その他: 本補助の受領者には、糖質学会ニューズレターに学会報告を書いていただきます。

以上、多数のご応募をお待ちしています。

令和 7 年度役員(任期 2025. 7. 1～2027. 6. 30)

会 長 梶原 康宏

副会長 鈴木 匡

理 事 安藤 弘宗

金川 基

川崎 ナナ

北爪 しのぶ

木下 聖子

佐藤 ちひろ

藤本 ゆかり

松尾 一郎

山口 芳樹

監 事 加藤 晃一

蟹江 治

加藤 啓子 京都産業大学生命科学科

加藤 晃一 自然科学研究機構生命創成探究センター

金川 基 愛媛大学大学院医学系研究科

金森 審子 東海大学工学部

蟹江 治 東海大学工学部

樺山 一哉 大阪大学放射線科学学際研究センター

鎌田 佳宏 大阪大学大学院医学系研究科

亀井加恵子 京都工芸繊維大学分子化学系

亀山 昭彦 産業技術総合研究所細胞分子工学研究部門

川崎 ナナ 横浜市立大学大学院生命医科学研究科

川島 博人 千葉大学大学院薬学研究院

北岡 本光 新潟大学農学部

北川 裕之 神戸薬科大学薬学部

北爪しのぶ 福島県立医科大学保健科学部

木塚 康彦 岐阜大学糖鎖生命コア研究所

木下 聖子 創価大学理工学部

顧 建国 東北医科薬科大学分子生体膜研究所

小谷 典弘 埼玉医科大学医学部

坂元 一真 愛知県医療療育総合センター

佐藤あやの 岡山大学学術研究院

佐藤 武史 長岡技術科学大学生物系

佐藤ちひろ 名古屋大学糖鎖生命コア研究所・生命農学研究科

塩崎 一弘 鹿児島大学水産学部

篠原 康郎 金城学院大学薬学部

島本 啓子 公益財団法人サントリー生命科学財団

清水 史郎 慶應義塾大学理工学部応用化学科

清水 弘樹 産業技術総合研究所細胞分子工学研究部門

鈴木 匡 理化学研究所開拓研究本部

高橋 素子 札幌医科大学医学部

武内 智春 愛知学院大学薬学部

竹内 英之 静岡県立大学薬学部・大学院薬学研究院

竹川 薫 九州大学大学院農学研究院

武田 陽一 立命館大学生命科学部

竹松 弘 藤田医科大学医療科学部

館野 浩章 産業技術総合研究所細胞分子工学研究部門

田中 克典 理化学研究所開拓研究本部

田中 知成 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科

田中 浩士 東京科学大学物質理工学院

田村 純一 鳥取大学農学部

千葉 靖典 産業技術総合研究所生命工学領域

梅谷内 晶 創価大学理工学研究科

戸嶋 一敦 慶應義塾大学理工学部

戸谷希一郎 成蹊大学理工学部

苫米地祐輔 東海大学工学部

豊田 英尚 立命館大学薬学部

豊田 雅士 東京都健康長寿医療センター研究所

評議員 (任期 2025. 7. 1～2026. 6. 30)

相川 京子 お茶の水女子大学基幹研究院自然科学系

赤井 昭二 女子栄養大学応用有機化学研究室

芦田 久 近畿大学生物理工学部

荒田洋一郎 帝京大学薬学部

安藤 弘宗 岐阜大学糖鎖生命コア研究所

池田 義孝 佐賀大学医学部

池原 譲 千葉大学医学部

石水 毅 立命館大学生命科学部

和泉 雅之 高知大学理工学部

板野 直樹 京都産業大学生命科学部

一柳 剛 鳥取大学農学部

糸乗 前 滋賀大学教育学部

稲森啓一郎 東北医科薬科大学分子生体膜研究所

井貫 晋輔 徳島大学大学院医歯薬学研究部

井原 義人 和歌山県立医科大学医学部

今村 彰宏 岐阜大学応用生物科学部

上村 和秀 中部大学生命健康科学部

大川 祐樹 大阪国際がんセンター糖鎖オンコロジー部

大谷 克城 酪農学園大学農食環境学群

大坪 和明 熊本大学大学院生命科学研究部

大橋 貴生 摂南大学理工学部生命科学科

大海 雄介 中部大学生命健康科学部

岡島 徹也 名古屋大学糖鎖生命コア研究所・医学系研究科

岡本 亮 成蹊大学理工学部理工学科

沖野 望 九州大学大学院農学研究院

越智 里香 高知大学教育研究部

柿崎 育子 弘前大学大学院医学研究科

笠原 浩二 東京都医学総合研究所細胞膜研究室

梶原 康宏 大阪大学大学院理学研究科

片山 高嶺 京都大学大学院生命科学研究科

加藤 敦 富山大学附属病院薬剤部

中川 優 名古屋大学糖鎖生命コア研究所
 中北 慎一 香川大学医学部総合生命科学講座
 中嶋 和紀 岐阜大学糖鎖生命コア研究所
 中野 博文 愛知教育大学自然科学系化学
 中の三弥子 広島大学大学院統合生命科学研究科
 長束 俊治 新潟大学理学部
 西島 謙一 名古屋大学大学院生命農学研究科
 蟻川 暁 神戸大学バイオシグナル総合研究センター
 野上 敏材 鳥取大学工学部
 野中 元裕 京都大学大学院医学研究科
 羽田 紀康 東京理科大学薬学部
 花島 慎弥 鳥取大学工学部
 濱村 和紀 愛知学院大学歯学部薬理学講座
 原田陽一郎 名古屋大学糖鎖生命コア研究所
 東 伸昭 星薬科大学薬学部
 比能 洋 北海道大学大学院先端生命科学研究院
 平井 剛 九州大学大学院薬学研究院
 藤田 盛久 岐阜大学糖鎖生命コア研究所
 伏信 進矢 東京大学大学院農学生命科学研究科
 藤本ゆかり 慶應義塾大学理工学部
 藤山 和仁 大阪大学生物工学国際交流センター
 古川 潤一 名古屋大学糖鎖生命コア研究所
 北條 裕信 大阪大学蛋白質研究所
 保坂 善真 九州大学大学院農学研究院
 細野 雅祐 東北医科薬科大学分子認識学教室
 前田 恵 岡山大学大学院学術研究院
 松尾 一郎 群馬大学大学院理工学府
 松岡 浩司 埼玉大学大学院理工学研究科
 松野 健治 大阪大学大学院理学研究科
 松原 輝彦 慶應義塾大学理工学部
 眞鍋 史乃 星薬科大学薬学部
 萬谷 博 東京都健康長寿医療センター研究所
 三浦 佳子 九州大学大学院工学研究院
 水野 真盛 (公財)野口研究所糖鎖有機化学研究室
 三苫 純也 九州保健福祉大学生命医科学部
 南 彰 順天堂大学薬学部
 宮田 真路 東京農工大学農学部
 宮西 伸光 東洋大学食環境科学部
 三善 英知 大阪大学大学院医学系研究科
 門出 健次 北海道大学大学院先端生命科学研究院
 矢木 宏和 名古屋市立大学大学院薬学研究科

矢部 富雄 岐阜大学応用生物科学部・糖鎖生命コア研究所
 山口 拓実 北陸先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科
 山口 真範 和歌山大学教育学部
 山口 芳樹 東北医科薬科大学分子生体膜研究所
 山地 俊之 順天堂大学薬学部微生物・免疫学分野
 山田 一作 公益財団法人野口研究所糖鎖情報科学研究室
 山田 修平 名城大学薬学部・病態生化学研究室
 湯浅 英哉 東京科学大学大学院生命理工学研究科
 吉田 雪子 東京都医学総合研究所ヒトゲノムプロジェクト

名誉会員

池中 徳治	石田 秀治	石戸 良治
伊東 信	伊藤 幸成	稲津 敏行
小川 智也	小川 温子	笠井 献一
門松 健治	川崎 敏祐	木曾 真
北島 健	木下 タロウ	木全 弘治
楠本 正一	木幡 陽	鈴木 明身
鈴木 茂生	鈴木 康夫	隅田 泰生
谷口 直之	西原 祥子	橋本 弘信
深瀬 浩一	古川 鋼一	本家 孝一
村松 喬	山形 達也	山本 憲二

顧問

一島 英治

維持会員

KHネオケム (株)
 (一財) 杉山産業化学研究所
 (株) スディックスバイオテック
 住友ベークライト (株)
 生化学工業 (株)
 MP五協フード&ケミカル (株)
 東京化成工業 (株)
 (公財) 野口研究所
 (株) 伏見製薬所
 松谷化学工業 (株)
 (株) ヤクルト

JSCR Newsletter（日本糖質学会会報）Vol. 29, No. 2

2026年1月25日 発行

編集兼発行 日本糖質学会

会長 梶原 康宏

〒103-0014 中央区日本橋蛸殻町1-38-12
油商会館3F

TEL: 03-5642-3700

FAX: 03-5642-3714

JSCR Newsletter 編集委員会

川崎 ナナ

山口 芳樹